



# 乳幼児の音楽的成長過程に関する研究 : 話し言葉・運動動作の発達との関わりを中心に

岡林, 典子

---

(Degree)

博士 (学術)

(Date of Degree)

2007-03-25

(Date of Publication)

2008-07-11

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

甲3889

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1003889>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



【 258 】

氏 名・(本 籍)	岡林 典子	( 兵庫県 )
博士の専攻分野の名称	博士(学術)	
学 位 記 番 号	博い第663号	
学位授与の 要 件	学位規則第5条第1項該当	
学位授与の 日 付	平成19年3月25日	

【 学位論文題目 】

乳幼児の音楽的成長過程に関する研究-話し言葉・運動動作の  
発達との関わりを中心に-

審 査 委 員

主 査	教 授	岩井 正浩
	教 授	五味 克久
	教 授	佐々木 倫子
	助教授	木下 孝司
	教 授	柴 眞理子

## 論文内容の要旨

氏名 岡林 典子  
 専攻 コミュニケーション科学専攻  
 指導教官氏名 岩井 正浩

## 論文題目

乳幼児の音楽的成長過程に関する研究  
 一話し言葉・運動動作の発達との関わりを中心に—

## 論文要旨

本論文では、子どもの音楽性の本質を見据えた発達研究を行なうために、日本の文化・社会の中で日本語を習得しつつある子どもの音楽的成長・発達の筋道を解明することを目的として研究に取り組んだ。そして、民族音楽学の理論と方法論に依拠して、子どもが周囲の人々とかかわり、様々な生活体験を通して、話し言葉や運動動作などを獲得していく成長の過程を、音楽的な視点で捉えた。第1章では、本論文で扱う音楽的行為の概念について、背景とする理論を基に説明した。観察データから音楽的行為を抽出し、分析することが中心となる観察研究においては、どのような行為を「音楽的である」と捉えるかということが、研究の根幹に関わる重要なポイントである。そこで、第1章1節1項では、まず本論文で扱う音楽的行為の内容を述べた。2項では、乳幼児の行動を音楽的な視点から分析する観察研究を意欲的に進めている4人の研究者たちが、子どもの音楽的行為をどのように捉えているのかを、事例の分析記述より比較検討した。その結果、大人の音楽に対する考え方や捉え方の延長上に子どもの音楽的行為を捉えようとする研究と、大人の音楽に対する偏見をはさまず、子どもの立場に立って子どもの音楽的行為を捉え、理解することが必要であるとする研究があることが明らかになった。また、3項では本論文で扱う音楽的行為の概念規定の根拠について、背景となるブラッキング理論や藤田理論に依拠して行った保育園での観察研究の結果を用いて説明をした。さらに2節1項では、本論文で用いた研究方法について述べ、2項では観察対象とフィールドワークの実際について述べた。

第2章では、観察対象の個人差に配慮するために、1節において話し言葉の発達過程に関して、一般的な子どもと本論文の観察対象であるY児について概観した。また、2節において運動動作の発達過程に関して、一般的な子どもと本論文の観察対象であるY児について概観した。そして、3節では、一般的に認められる乳幼児の話し言葉や運動動作の発達過程と、Y児にみられた発達過程を表にして比較検討した。その結果、Y児の音声言語の発達は、2語発話の出現時期までは、一般的な子どもとほぼ同様の発達を示しているが、その後の3語～多語発話期に至っては、一般的な子どもよりも4か月程度、成長が早いことが明らかになった。また、運動動作の発達については、1年を過ぎた頃から、段階のぼりやジャ

ンプに関して、一般の子どもよりも、5～7か月程度早い成長を示していることが明らかになった。このように、1節と2節から、Y児の発達過程を全体的に概観すると、Y児は一般的な子どもよりも少し成長が早いことが認められた。

第3章では、Y児の言葉の発達段階に沿って音楽的行為の変化過程を捉えた。その結果、Y児の音楽的行為は、1語発話前期から言葉を拍節的にまとめようとする行為が認められた。その背景には養育者によって、4音が2拍（律拍）のまとまりへと導かれる働きかけが認められた。その後、Y児は1語発話後期で日本語の4拍（律拍）の枠組みを獲得し、2語発話期に8拍（律拍）の基本的な拍節構造に基づくリズム感を獲得して、音声や言葉をリズムカルにまとめる音楽的行為を試みていた。また抑揚的に言葉を唱える行為は、拍節的にまとめる行為よりも少し遅れ、1語発話後期に語の抑揚が拡大し、その後2語発話期の段階で2音旋律獲得の兆しが認められた。さらに言語の獲得が進み、安定してきた3語～多語発話期になると2音旋律が獲得され、続いて3音旋律獲得の兆しが認められた。また、さらに時期が進むと、3音旋律の獲得が認められた。

以上のことから、言語を習得してゆく過程において、日本語に基づく拍節感覚の方が旋律感覚よりも先に身につくという順序性を捉えることができた。また、言葉や動作を音楽的にまとめる行為は、それぞれの言語の発達段階よりも少し遅れて現れることが明らかになった。すなわち、1語を用いた音楽的行為は、さらに言語獲得が進んだ状況にある2語発話期に発現する。また2語を用いた音楽的行為は、さらに言語獲得が進んだ3語～多語発話期に発現することが認められたのである。これらのことは、一人の子どもの言語獲得状況と音楽的行為の関係を縦断的に調べることによって明らかにされた知見である。

3章で得られた知見を詳細に検討するため、4章から6章において、さらに事例の分析を進めた。第4章では、日本語に基づく拍節感覚の獲得過程を捉えるために、運動動作に伴う「かけ声」に焦点を当て、養育者とY児の間にかけ声を用いてどのような音楽的やりとりがなされているのか、その実際を示した。また、Y児の音楽的行為の発達の発達的特徴についても明らかにした。結果からは、養育者が、寝返りやつかまり立ち、あるいは階段のぼりをしようとしているY児の状態を受け止め、共感し、そこに自らの気持ちを沿わせ、声によって励ましていた。それぞれの事例からは、次のようなことが認められた。養育者はY児の寝返り動作が途中で止まると、声のトーンを高くして、多様なリズムを用いてかけ声をかけていた。また、Y児が動作を起こそうとして力を入れる時には拍点のリズムを用いて働きかけ、スムーズな動作の流れの時には、均等な音価を用いたかけ声であった。さらに、Y児の階段のぼりの動作に呼吸を合わせて、ゆっくりと3拍のまとまりでかけ声をかけていた。これらに共通する特徴は、養育者がY児の動きに沿わせてリズムや調子でかけ声をかけていることである。Y児はこのような養育者の働きかけを受けとめ、1語発話前期になると、自分の動作に伴って「ヨッチョッ」「イヨイ」などのかけ声らしきものを発声し、1音と1動作を同期させようとしていた。また、養育者や父親とのさまざまなかけ声を用いたやりとりを通して、Y児は声と動作を音楽的にまとめるためのルールを獲得し、

(氏名 岡林 典子、No3)

これを用いて自身の情動表現にふさわしいあり方で表現することができるようになっていった。

第5章では、日本語に基づく旋律感覚の獲得過程を捉えるために、抑揚的な日本語として、擬音語「プーラン、プーラン」に焦点をあて、Y児が抑揚的な擬音語を習得していく過程において、養育者との間にどのようなやりとりがなされているのか、その実際を示した。また、Y児の音楽的行為の発達の変化の特徴についても明らかにした。結果からは、以下のことが認められた。前言語期にY児が養育者からの音楽的な働きかけを受けとめることに始まり、1語発話後期には、養育者の働きかけをきっかけに、「プー、ダン」と拍節的に発話し始めることや、自分の身体を言葉のリズムに同期させて揺らすなどの行為が身につくことが認められた。また2語発話期には、自発的に揺れる物体の動きに合わせて唱えたり、養育者との関係において主導的立場に立った音楽的行為をみせるようになった。そして3語～多語発話期になると、2音旋律獲得の兆しが認められ、次第に2音旋律を獲得し、さらに3音旋律獲得の兆しが認められた。以上、4章と5章からは、拍節的な日本語と抑揚的な日本語の獲得過程を比較することによって拍節感覚の獲得が先行することが明らかとなった。

第6章では、3～5章で明らかになった日本語を基にした伝統的な拍節感と旋律感が歌う行為の中ではどのように現れてくるのかを検討するために、遊ばせうた《チッチッ、こーこにとまれ》に焦点を当て、養育者とY児の間に「遊ばせうた」を用いてどのようなやりとりがなされているのか、その実際を示した。また、Y児が「遊ばせうた」を習得していく過程にみられる音楽的な発達変化の特徴を、話し言葉の発達との関わりを中心に明らかにした。観察事例の分析より、遊ばせうたの習得には、養育者が一方的に子どもを遊ばせようと働きかける段階から、子どもが主体的な表現者となる段階への移行過程が認められた。事例分析より、この移行過程には、子どもの日本語の獲得状況が少なからず関連していることが明らかになった。また、拍節的な音声表現や動作表現は1語発話前期から発現するが、2音旋律にのった音声表現は、3語～多語発話期に入ってから認められた。従って、「遊ばせうた」を習得していく過程においても拍節感覚が旋律感覚よりも先行することが確認できた。

終章では、本論文の事例一覧を各章に沿って表7-1にまとめ、観察対象Y児の音楽的成長の過程を示した。さらに、章の枠を超えて事例全体を俯瞰して捉え、音楽的行為の発達過程を以下の3点に措定し、表7-2を作成し、乳幼児の音楽的成長の過程として提示した。

- ① 日本語の音(おん)をもとに、一定の拍節リズムで言葉を唱えたり、音声や動作を拍節的にまとめる行為は、どのような筋道をたどって子どもに身につくのか
- ② 日本語の抑揚をもとに、一定の固定した音高で旋律的に言葉を唱えたり、音声をとめる行為は、どのような過程をたどって子どもに身につくのか
- ③ 他者と呼吸を合わせて、動作や声をタイミングよく同期させる行為は、どのような過程をたどって子どもに身につくのか

## 論文審査の結果の要旨

氏名	岡林 典子		
論文題目	乳幼児の音楽的成長過程に関する研究—話し言葉・運動動作の発達との関わりを中心に—		
判定	合格・不合格		
審査委員	区分	職名	氏名
	主査	教授	岩井正浩
	副査	教授	五味克久
	副査	教授	佐々木倫子
	副査	助教授	木下孝司
	副査	教授	柴眞理子
要 旨			
<p>本審査委員会は、岡林典子氏の提出した『乳幼児の音楽的成長過程に関する研究—話し言葉・運動動作の発達との関わりを中心に—』について審査し、以下の結果を得た。</p> <p>本論文は、子どもの音楽性の本質を見据えた発達研究に資するため、日本文化・社会の中で、日本語を習得しつつある子どもの音楽的成長・発達の筋道を解明することを目的としている。そしてその理論と方法論を民族音楽学に依拠し、子どもが周囲の人々、様々な生活体験の中でいかにして話し言葉や運動動作などを獲得していくかを音楽的視点で解明している。</p> <p>全体は、序章(1, 2, 3節)、第1章(1, 2節)、第2章(1, 2, 3節)、第3章(1, 2, 3, 4, 5節)、第4章(1, 2, 3節)、第5章(1, 2, 3節)、第6章(1, 2, 3節)、および終章(1, 2節)の181ページ(40字×30行)、表(A3版)、引用・参考文献12ページの合計194ページで構成されている。</p> <p>第1章では音楽的行為の概念と背景とする理論について論述している。岡林氏は、本論文の基本的理念を、「どのような行為を音楽的であるというか」について、従来の理念である「大人の音楽に対する考え方や捉え方の延長線上に子どもの音楽的行為を位置づけようとする」のではなく、「大人の音楽に対する偏見をはきまぜ、子どもの立場に立って子どもの音楽的行為を捉え、理解すること」と位置づけている。方法論はフィールドワークとエスノグラフィに基づき、岡林氏の長女を対象者とし、生後0ヶ月から30ヶ月までの期間を設定している。これは音楽を1つの価値観、1つの指標でみるのではなく、相対的・多様な価値観でアプローチする民族音楽学的研究方法である。</p>			

第2章では、観察対象の個人差に配慮するために、話し言葉と運動動作の発達過程について検討している。その結果、Y児（長女）の音声言語の発達は2語～多語発話期で、一般的な子どもより次第に成長が早くなったこと、運動動作の発達は、1年過ぎた頃から階段のぼりやジャンプに関して一般の子どもよりも5～7ヶ月程度早い成長が明らかになったとしている。

第3章では、Y児の言葉の発達段階に沿った音楽的行為の変化過程を捉えている。その結果、Y児の音楽的行為は、1語発話前期から言葉を拍節的にまとめようとする行為が、さらに安定してきた3語～多語発話期になると、2語旋律からさらに3音旋律の獲得を認めている。以上から、言語を習得していく過程において、日本語に基づく拍節感覚の方が旋律感覚よりも先に身につくという順序性を発見している。

第4章では、日本語に基づく拍節感覚の獲得過程を捉えるために、運動動作に伴う「かけ声」に焦点を当て、養育者とY児の間にかけ声を用いて、どのような音楽的やりとりがなされているのかについて、その実際を示している。その結果、養育者や父親とのさまざまなかけ声をもちいたやりとりを通して、Y児は声と動作を音楽的にまとめるためのルールを獲得し、これを用いて自身の情動表現にふさわしいあり方で表現することができるようになったとしている。

第5章では、日本語に基づく旋律感覚の獲得過程を捉えるために、抑揚的な日本語として、擬音語「プーラン、プーラン」に焦点を当て、Y児が抑揚的な擬音語を習得していく過程において、養育者との間にどのようなやりとりがなされているのか、その実態を示している。その結果、拍節的な日本語と抑揚的な日本語の獲得過程を比較することで、拍節感覚の獲得が先行することを明らかにしている。

第6章では、日本語を基にした伝統的な拍節感と旋律感が、歌う行為の中でどのように現れてくるのかを、遊ばせ歌《チッチ、こーこにとまれ》に焦点を当て、養育者とY児との間の「遊ばせ歌」でその実際を示している。観察事例の分析から、子どもが主体的な表現者になっていく移行過程が認められたとともに、この過程には子どもの日本語獲得状況が少なからず関連していること、拍節感覚が旋律感覚より先行することを確認している。

終章では、乳幼児の音楽的成長の過程を3点にまとめている。

①実例は、子どもが日本語の拍節的な枠組みを、2拍から倍の4拍、さらに8拍へと獲得する枠を広げていることを実証している。これが日本の文化と関わって育つ子どもの音楽的成長の過程であること。

②Y児が言葉や音声を旋律的に唱える行為には、早期から培ってきた日本語の拍節感覚が作用していること。

③観察事例の分析を通じて、子どもは「いないいないばあ」遊びや絵本の読み聞かせなどを通して、呼吸を合わせる関係を築き、音楽的なコミュニケーションの基盤を形成していること。

本研究は、民族音楽学の方法論に依拠し、フィールドワークとエスノグラフィーによる音楽の文化的分析手法を用いて、子どもの音楽的行為を生後0歳から30ヶ月にかけて丹念かつ綿密に観察・調査を実施した労作である。今まで音楽的であると捉えられなかった子どもの日常の原初的表現行為を音楽的行為として位置づけたこと、日本の文化社会に育つ子どもたちが日常的な生活経験や遊びで、同じ文化を共有する人々との関わりを通して音楽的表現法を身につけ、表現する主体として成長している過程を、実例をもって実証した本研究は独創的研究として評価に値する。なお参考文献として3編の査読付論文が提出されており、条件を満たしている。

本研究は、「乳幼児の音楽的成長過程に関する研究—話し言葉・運動動作の発達との関わりを中心に—」について研究したものであり、当該分野において重要な知見を得たものとして学術的に価値ある貢献であると認められる。よって本審査委員会は、岡林典子氏は博士（学術）の学位を得る資格があるものと認める。

[査読付参考文献]

- (1) 「音楽発達研究における人類学的アプローチの有用性」  
 全国大学音楽教育学会研究紀要 第16号 pp.31-40 2005年
- (2) 「生活の中の音楽的行為に関する一考察—応答唱《かーわってー・いいよー》の成立過程の縦断的観察から—」  
 保育学研究 第41巻第2号 pp.210-217 2003年
- (3) 「言語習得期の子どもにみられる音楽的表現—幼児の15～18か月における行動観察から—」  
 乳幼児教育学研究 第9号 pp.13-22 2000年  
 他4編